

1. トレインラック
～ 廃車体による川越駅の統合



2. 住みながら耕す
～ 農から広がる地域コミュニティ



3. 探求の城
～ アキハバの奥から導く表象の裏側



4. 揺らぐベンチ
～ 体じゅう感じて～

永田 拓渡

敷地： 埼玉県川越市
用途： 駅・商業施設

歴史的な経緯により、東武・西武・JR ごとに分かれて存在する川越の駅を一つに統合する。同時に連続立体交差化を行い、都市の線路による分断を解消する。東西の広場から交通機能を移設し、GL でつなぐことで、広場を人間の手に取りもどす。
新駅舎は、統合の象徴として各社の引退した鉄道車輛の構体を再利用することになった。建築でないものを建築に転用するとき、その配置によるドアの新しい見え方や、車輛を自由に配置するために工夫された鉄骨フレームの設計、車輛同士の関係または車両とホームの関係の建築化など、独特な景観を持って立ち上がる。

三宅 景

敷地： 東京都練馬区西大泉 4 丁目
用途： 集合住宅・直売所・レストラン

農業従事者の減少や高齢化が進む現代社会において、農地を従来の用途のみで維持していくことは難しい。そこで、都市に住みながら農業に関わりたい人と都市農家を結ぶために、農地を部分的に宅地化する。ここでの「宅地化」とはよくある「農地をすべてコンクリートで埋めて住宅地を開発する手法」ではなく、農地を最大限残し、生産緑地に住みながら耕すための集合住宅である。
さらに、農家レストランや農産物直売所等を設けることで、そこに住む住民だけでなく地域住民の利用を促し、農業を介するコミュニティの形成を促す。

井川 日果瑠

敷地： 秋葉原
用途： 商業・オフィス複合施設

情報化社会によって秋葉原はいつしかコンテンツ消費だけの街へと変化し、新しい文化を創っていく街の姿は失われつつある。
2023 年 10 月に再開発が決定した秋葉原電気街の玄関口となる敷地を対象に、商業と新たに創造の空間を加えた複合施設を計画する。
秋葉原を形作るペンシルビルや外部に露出する広告の裏に隠れた秋葉原の奥性を分析することによって、立面や内部空間を構成し、情報化社会によって奪われた人間の探求心と新しさを発信する秋葉原の街の復活を図る。

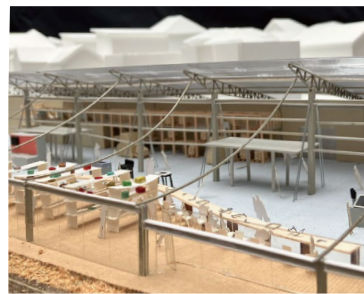
浅井薫平

敷地： なし
用途： ベンチ

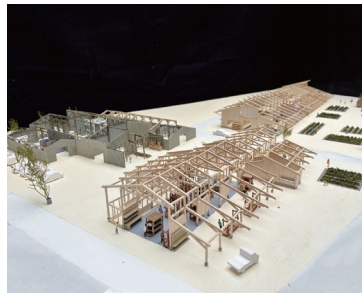
動くベンチがあれば何が起ころう？ 通常、ベンチは静止し固定されている。これにより、利用者は設置されたベンチの形態に従って利用する。
すなわち、利用者はベンチの形態によりその利用方法は大きく制限される。本設計では、福島県会津地方の伝統玩具である「起き上がりこぼし」の構造をヒントに、利用者の動きや着座位置により揺らぎ、傾く自由度の高い「揺らぐベンチ」を提案し、通常の動きが固定されたベンチにはない利用形態や、揺らぎによる利用者間のコミュニケーションを創出する。



5. こどもと共に紡ぐフリースクール
あめつちのいえ物語



6. もの RePUBLIC
～ 加工場機能を中心としたビルダーズセンター



7. 資源的アクセシビリティへの架構



8. 日陰に集まる広がる
～ 自然発生的路上市場の引越し先

瀬底 実理

敷地： 神奈川県愛甲郡愛川町半原
用途： フリースクール

かつて糸の町として栄えた半原地区で、鋸屋根の元燃糸工場が子供のための居場所、フリースクール「あめつちのいえ」として生まれ変わった。ここではこども、保護者、経営者があるのままの姿で過ごし、それぞれのリズムで対話を持って交わる。この稀有な関係性を守りたい。
学校の代替案としての可能性を持ちながら組織として脆いフリースクールが、子供の居場所として存続していく為の設計提案。経営者兼居住者の生活を軸に、既存のネットワークを活かして担い手を広げつつ、ランドスケープ全体を使ってフリースクールが展開していく様子を描く。

本住 拓真

敷地： 東京都世田谷区成城 1 丁目
用途： 道具資材小売店・作業工房

私達の暮らしは高度な技術により、快適になった反面、自らの力による制作技術は退化した。
ものづくりの基盤であるホームセンターは多種多様な商品を効率的にストックする形態となっており、ものづくりをするための形態からかけ離れている。そこで本設計では、加工場機能を追加し、それを中心に関連する資材や道具を配すことで、ものづくりの解像度を高める。また、ものの移動・保管・加工に要するスケールに応じて空間が規定され、架構がかかり、ものづくりに焦点を合わせた形態へと改変し、ものづくりへの敷居を下げる建築を提案する。

国本春樹

敷地： 東京都江戸川区
用途： 堆肥工場+マーケット

大量生産、大量消費が当たり前となっている世の中で、環境問題に対する解決策の一つとして循環型社会を目指す動きがある。そうした中、生ごみや剪定した枝葉の堆肥化や、家具や建具の修理などは、一般家庭でも行える循環の一つである。しかし、身近にある循環へのアクセスは現状活発には行われていない。そこで本設計では資源の活用方法やそれに伴った道具の使い方、生活などに日常的に体験できる施設の計画を行う。

加治木 陽菜

敷地： ベトナムホーチミン市 1 区ベンゲール
用途： 店舗・住宅

自然発生的にできた路上市場であるトンタットダム市場は、15 年前から立退が要請されているが、現在でも歩道と道路の一部を占有する市場となっている。
歩道や道路の占有は同市で問題となっているが解決せず、2024 年より歩道や道路の使用料を徴収することが決定した。これにより路上市場の立退が進むと考えられるが、市民の手によって作られた市場がなくならぬホーチミン市の一つの失われる。
立退を余儀なくされた市場の売り子が、用意された売り場ではなく自分たちの手で街区内に自然発生市場を作ることで、同市らしさをなくすことなく市場を移動する。

「根を張る」

東京都立大学有志卒業設計展は日本橋ガレリアエアリアマネジメント様のご協力により、2 年目の開催を迎えました。建築学科の卒業設計は自らで設計するテーマや敷地を決め、自分の興味や世界観を発信する場です。これは、単なる授業の課題やクライアントから依頼を受けて設計をする通常の設計業務とは大きく異なります。私たちは卒業設計を自分自身の価値観を見つめ直し、卒業しそれぞれの道を歩んでいく私たちの人生の根幹となるものと捉えました。この展示会を通して、卒業設計が私たちのこれまでの人生に大きく根を張ることを願うとともに、私たちの見据える未来を多くの方々感じて頂きたいです。

展示順路

